



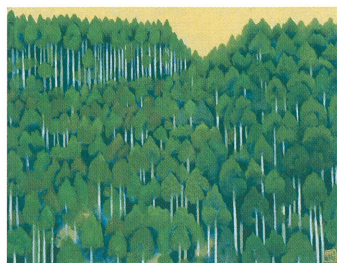
## 春の特別展

2008年4月19日(土)～6月1日(日)

### 川端康成と東山魁夷 響きあう美の世界

1・2階展示室

1955(昭和30)年、東山魁夷は新潮社の表紙絵制作をきっかけに、川端康成(1899—1972)との知遇を得ます。文豪と画家、9歳の年齢の差をこえて、二人の心は美の探究を接点にして深く通じ合いました。川端の助言により魁夷は連作<京洛四季>を描き、川端は自らの小説の挿絵や装丁を魁夷に依頼するなど、二人の交流は相互の創作活動にも影響を与えるようになります。およそ16年間にわたって、折々に交わされた手紙は敬愛の念のこもったもので、幸いにも100通を超える往復書簡が近年発見されました。初めて川端邸を訪れた魁夷をもてなしたという川端所蔵の浦上玉堂<凍雲籬雪図>や、川端の文化勲章受賞祝いに魁夷が贈った<冬の花>、ノーベル賞受賞決定の夜に川端が揮毫した書に魁夷が絵を添えて仕立てた屏風<秋の野に>など、二人の親交を物語る美術品も現存します。本展では、書簡を読み解きながら、関連する魁夷の作品や川端ゆかりの愛蔵品を展示し、二人の偉大な芸術家の心の交流を偲びます。



冬の花 1962年(紙本彩色・習作)財団法人川端康成記念会蔵

## 秋の特別展

2008年9月20日(土)～11月3日(月)

### 美の発見 魁夷の愛蔵品と中国の風景

1・2階展示室

魁夷は、出版社の仕事で偶然、鎌倉の自宅に川端康成を訪ねる機会を得ました。これをきっかけに美術と文学のジャンルを越えた二人の交流が始まりました。川端康成は古美術品の蒐集に優れた審美眼を持ち合わせ、魁夷もまた古美術にまつわる美意識についての薫陶を受けるなど二人の交流は親密なものへと発展しました。魁夷のコレクションは、洋の東西を問わず、ヨーロッパの古代美術から近代の茶道具に至るまで蒐集しました。魁夷の美の原点ともいえる愛すべき美術品の数々を紹介します。魁夷は、唐招提寺御影堂障壁画の制作を依頼されたことを受けて、1975(昭和50)年に日本の山と海を主題に第1期障壁画<山雲・濤声>を制作しました。次いで、第2期は鑑真和尚が生まれ育った中国の風景を描くという構想から中国へ取材することとなりました。魁夷は、広州から桂林、黄山、揚州を訪れ、障壁画の三題<黄山曉雲><揚州薰風><桂林月宵>が1980(昭和55)年に完成します。本展では中国で取材した際の素描作品約20点を展示します。



精部襷子 絵志野茶碗 東山魁夷

## 第1期テーマ作品展

2008年6月6日(金)～7月16日(水)

### 生誕100年記念 風景に魅せられた画家 東山魁夷

東山魁夷は1908(明41)年、横浜に生まれました。本名を新吉といい、幼い頃から絵本を読んだり絵を描いたりしながら一人部屋に閉じこもる少年時代を過ごしました。中学の恩師の勧めで絵を志す決心をし、東京美術学校の日本画科へ入学、広い視野に立って美術を知りたいと卒業後はドイツへ留学します。終戦後の1947(昭和22)年、復興した第3回日展に出品した<残照>が特選を受賞、以後風景画家として立つことを決意しました。国内において欧米の新しい美術が主導的立場を握る中、衰弱した日本画の新しい道を切り拓くことに情熱を傾けた魁夷は、次代を担う新進の日本画家にも大いに影響を与えました。日展を中心に制作活動を進めた魁夷は、1999(平11)年、90歳で亡くなるまで、皇居新宮殿壁画<朝明けの潮>、京都に取材した<京洛四季>の一連の作品、唐招提寺の障壁画<山雲・濤声>など数々の代表作を残しました。本展覧会は魁夷の生誕100周年を記念し、戦後の日展に出品した代表作を中心に魁夷の仕事を紹介するものです。

1・2階展示室



残照(リトグラフ)



月光 1998年(麻布彩色)

## 第3期テーマ作品展

2008年11月8日(土)～2009年1月25日(日)

### 白雪にかがやく静寂の光景

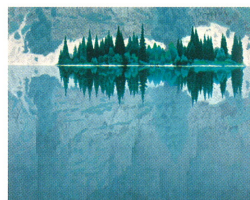
厳しい冬の風景には一切の音が失われ、生命の鼓動すら感じられない静寂な空間が広がり、時として真っ白なヴェールで覆われたかのような白銀の世界と化すのです。鏡のように凍りついた湖面には常緑樹の影が映し出され、魁夷はこの光景を目の当たりにして寒さに耐える微かな生命の声を耳にします。失われた色彩と広大な自然のひろがりは、春の訪れを待ち望む冬の姿でもあるのです。本展では、冬、沈黙の光景にかすかな自然の息吹を奏でる魁夷の心象風景を紹介します。

1階展示室



北国の森(木版画)

2階展示室



みつらみ(リトグラフ)

### 心の投影／水に映る情景

「鏡のような水面は、黒く連なる針葉樹の森をそのままの姿に映している」「月が、空と水の上とに二つあった」白夜の季節のフィンランドで、魁夷が出会った幻想的な光景です。それ以来、水面に風景が映り込む上下対称の画面は、魁夷が好んで描いた印象的な構図となりました。実際の風景にびたりと寄り添う倒影は、「風景は心の鏡」と主張する魁夷自身の心であるとも思われ、静かに澄み切った風景は、私達の心にもその共鳴の響きを伝えてくれます。

## 第2期テーマ作品展

2008年7月19日(土)～9月15日(月)

### かわいいとどうぶつたち

風景画家東山魁夷は、生きものへの親しみやいつくしみも風景に込めて描くので、絵の中に人物や動物を描き入れることは稀なことです。写生道具を持って好んで自然の中に赴き、夏の高原では鳥達の合唱に耳を澄ませ、冬の高原では雪の上に数々の足跡を見つけながら、魁夷は常に、命あるものへ大きな共感を寄せていました。その想いはある時、白馬となって画面に現れます。1972年の連作<白い馬の見える風景>を中心に、動物が登場する魁夷の作品を紹介します。

1階展示室



揺れる窓(リトグラフ)

### 動と静—遙かなる日本の海と山

太平洋側の比較的穏やかな海、荒波打ち寄せる豪快な日本海、どちらも日本の特徴的な風景です。美しい山々も、季節によってその姿を一変し、山深くには厳しい環境が潜んでいます。日本の風土は長い年月をかけて自然と自然がせめぎ合う中で育まれてきました。魁夷は風景との対話からこうした厳しさと優しさを兼ね備える自然の真の姿を捉え、心に秘めた感動を映し出そうとしています。海と山を主題に魁夷の眼をとらえて見た日本の原風景を紹介します。

2階展示室



波濤(リトグラフ)

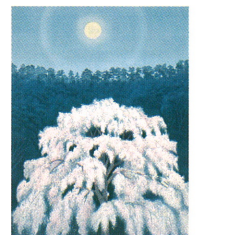
## 第4期テーマ作品展

2009年1月28日(水)～4月12日(日)

### 京都慕情／都のすがた—とどめおかまし

魁夷は川端康成の助言により、数年をかけて四季を通じての京都の素顔を描きとめました。北歐には、古い習慣や風情が現在の人々の生活の中に生き続けていることに感動した魁夷に、川端は消えつつあった日本の古都の風情を惜しみ、「京都を描くのならば今のうちですよ」と提言、1968(昭和43)年、連作完成にあたっては《都のすがた—とどめおかまし》と題する美文をしたためたのでした。本展では、京都の風情に魅せられ慕って止まない魁夷の心情を綴ります。

1階展示室



花明り(リトグラフ)

### 魁夷—高原を歩く

「日本人が高原の美しさに親むようになったのは、明治以後のことではないだろうか」と魁夷は記しています。シラカバやカラマツの繊細な樹形、楚々と咲く野生の草花の美しさは、清澄な自然に憧れる人々の心を満たし、高原の風景に魅了された魁夷は、自宅の庭にもシラカバの林を作るほどでした。爽やかな夏、厳しい冬と隣り合わせの春と秋。魁夷が四季を通じて訪れ描いた、長野県の蓼科高原や志賀高原など、詩情あふれる自然の姿を紹介します。

2階展示室



春丘(リトグラフ)